

不適切にもほどがある！

今回も引っ掻きもっかき書いた『ちょいワルエッセー』を提出することが出来てホッとした。

「さあユックリ遊ぼう、自分への誕生日プレゼント」とソウル一人旅を予約したその直後に、歴史講座の先生から一冊の本を手渡された。

『嘘だらけの日本古代史』倉山満 扶桑社新書 2023年11月1日初版

「自分の国の成り立ちくらいはちゃんと知っておきたい人に向けての本です。」とある。先生、いつもありがとうございます。旅の楽しみが増えました。

めったに一人で海外に行くことはないが、いつもと違う所に行って「李朝民画なるものを見られたら」と思い立ち、ブラッと出かけた。多分、『師任堂』の影響なのだろう。

一人で異国に行くことは勇気がいるが、青春の時は何でも見てみようと飛び出して行ったものだ。さっと出掛け、非日常の中で『嘘だらけ』と『民画』だけで十分満足だ。持ち歩き、空港で機中で街中のカフェで読んでいった。

「何が語り継がれてきたかを押えておくのが古代史を語る態度です。(中略) 皇位継承こそが日本古代史で最も重要な争点であり、最初に歴史を学ぶ時の軸となるのです」と最初に書いてある。なるほど。確かにこれまで学びの軸が私にはなかったような。



学び始めの頃に「岡宮天皇」陵に案内されて、誰だ？正面に行けないおかしな構造。草壁皇子が天皇になったり、神功皇后が抹殺されたり、天皇の代数はどうやって数えるのかとっていた。「弘文天皇」も大友皇子の諡号、それも明治三年に1199年ぶりの名誉回復とのこと。

さて、李朝民画はどこにある。

ソウル風物市場（ブルムンシジャン）に、のみの市みたいなどころがあるらしい。シンソル駅の近辺とあたりをつけて行ってはみたが、中心部から離れるほどにハングルばかりになり「のみ市」が見当たらない。それなりの雰囲気があって神田の古本屋街やモンマルトルを想像していたが、焼き肉屋が連なるばかりで諦めた。

ソウルの地下鉄網は凄いが、少し努力すれば乗りこなせる。バスはお手上げである。

이 자리는
임산부를 위한
자리입니다.

地下鉄電車の座った席の床に赤の何かが貼ってある。二人のおばちゃんが乗り込んで私を睨んでいるので「女性の席なのだろう」と譲ったが、あっちに座れシッシッシツと感じ悪し。調べてみたら「妊婦に席を譲ってね」だが、「あんたがた妊娠してないでしょ!」と悪態の一つも。

もう少し韓国のおモニは優しくかったと思うのですが、殺伐感があるなあ…。

昨夜の焼肉は 16,000W と書いてあったのに「二人分以上の注文じゃないとダメ」と云われ、しぶしぶ従いビール一本頼んで 37,000W。豚肉 440g も食べられっこないし、もう少しバイトの子たちよ臨機応変、ひとり旅行者には優しくしてほしいですね。

次の日は失敗をやらかさなげに注意して、参鶏湯を頼んだ。家族経営の古い昔の雰囲気で、そんな小さな店で日本人の可愛い娘が三人で食べていた。

参鶏湯を待つ間、お銚子一本人参酒、お番菜の肝炒めをおモニがどうぞと運んでくれた。

「参鶏湯、これどうやって食べるの」と娘に聞いてみた。

「スプーンでコンコン砕いて、グルグル混ぜて食べるのよ」

「骨はこっちの壺に入れるのよ」



店の中を眺めていると民画らしきものが壁に貼ってある。昼半量ぐらいで額入りだ。

「お嬢さんたち、この絵は李氏朝鮮時代に旅の絵師が描いた俗画みたいなものですよ。おじさんはこれを見に来て、なんか面白いよね。牛一頭もらっても両班に取り上げられてしまうかもしれないね。

絵師も陶工も身分は低くて賤民なんだ。『風の絵師』っていうドラマもあって、見たことある？ 良ければこれから一緒に探しにいってみる？」

「参鶏湯はかつて王族の食べ物でね、最近まで鶏の骨は床にポイポイ捨てていたんだよ」

こんなこと言おうもんなら「このオヤジ、うっぜえんだよ」と逆切れされかねない。

娘さんたちに聞かれたら控え目に応え、脂ぎらず、少しお褒めを混ぜるのが塩梅いい。

オーナーのおっかさんが味はどうかと聞いてきた。「マシソヨ」でニコッ。

もう一回、「チンジャア! マシソヨ～」で顔中笑顔になった。

よし、昨夜の不愉快は今日やさしさに包まれて相殺された。

これからコーヒー飲みなが「嘘だらけの日本古代史」を読んでしまおう。

通説・珍説が次々に木っ端みじんにされて小気味いい。

「神話は歴史学の対象ではない」という通説

皇国史観の全否定。しかし、マルクス主義に免疫があるのは古代史で、天皇抜きでは語れない。

「神武天皇の实在性は疑わしい」という通説

言い切れる根拠はない。多くの伝承があり本当とも嘘とも言えない。わからんが誠実な態度。仮説の積み重ねと常識への立ち返りを繰り返さねばならない。

引用は少しだけにしておきましょう。奈良から平安へ面白度が上がってゆきます。なを、皇位継承が軸ですから、卑弥呼は出て来ません。

アクロバティックな解釈で「邪馬台国は産業化」している、との一文もあります。



読書と散歩でいい気分、もう少し暖かければ極楽だ。

龍山駅の西側には高級ホテルがあってカジノがあって、東側には行ったことがない。だから、東側のプラタモリをしようと巨大駅舎のエスカレーターを降りて行ったら徴用工像があった。初めての現物、舐めるように見してきました。

日韓関係を慮って、古代史を日韓双方で議論し難いことは承知している。近現代史も同じでしょう。不幸な関係が永すぎる。大統領が未来志向と言っている今こそチャンスなのに。像の右肩にとまる鳥はハトかカラスか知らないが、その必然性が分からない。帰りの飛行機の座席の画面に、どこを飛んでいるのか地図が出る。BUSAN・FUKUOKA・TOKYO に交じって DOKUDO があった。

帰国してすぐに新聞を開くと、なんとも誇らしくなる記事が載っていた。

「建築界のノーベル賞 プリツカー賞 山本理顕さん受賞 日本人9人目」

韓国の教授が「この賞は文化レベルに与えられる賞だとみても構わない」と言っている。妙に予感が的中する時ってありますね。



ソウルの街中で、「あのビル既視感あるし、景観にそぐわないなあ」と撮っておいた一枚が左の写真です。

右の写真は水原華城でインスタ映えするからと嫌々撮った城壁です。

李朝のデザインを現代に持ってきて賞は取れないと思います。韓国は受賞0人。

「未来の町をどう描くか建築家には提案する責任がある」山本さんのお言葉です。



ひとつ腑に落ちぬ事の確認で、すぐに大濠公園の近くの韓国料理のお店に行き、そこのお嬢さんに焼肉二人前 37,000Wの話をしたら「おじさんが一人で来るなんて、変な人。普通はアベックよ。きっと変態と思われたのよ。そういう文化がまだ残っているのよ」不適切なのは私だったのかと反省はしたいが、お嬢さんの話しぶりは少し恥じているように聞こえました。

一冊目は「藤原氏の正体」、二冊目は「蘇我氏の正体」、三冊目は「物部氏の正体」とノートに書き留めて、目標 100 冊は越えたが如何せん、53 冊目も 89 冊目も覚えていない。軸がない乱読をしても通説、珍説が脳に溜まるばかり。

日本書紀を全部読んでいない。欠史八代は吹っ飛ばし、概要書に出てくるところを拾い読んで、要はいい加減。正しく言えば書紀を読んでいない。

変な喩えではあるが、江南にカンチャンゲジャンを食べに行こうにもソウル地下鉄路線図を眺めていても最適解を得られない。

試しに地下鉄1号線の駅をひとつひとつ追っていく。首爾駅（ソウル駅）を基点に、東北の山の方にはこんな名前の駅が現われます。

東大門・新設洞・月溪・道峰山・望月寺・義政府・保川・逍遙山・青山・全谷・漣川。

一方、ソウル駅から西南の海の方には、

南宮・龍山・九老・加山デジタル団地・石水・軍浦・義王・成均館大・水原・洗馬・双龍・温陽温泉・温水・富川・桃源・仁川。

これって地勢か、地形か、駅名で情景から風情から浮かぶではないか。東北の地は、「王宮を出ると、そこは市が立つ庶民の町。収穫を終え、奴婢たちが拾う落穂わずか。溪谷、川景色の中で鳥さえずり、月仰ぎ見れば遠く連なる峰。旅の絵師は一夜一宿、寺の縁で筆をとらずにはおられない。稜線の向こう、明日は風のスケッチ、逍遙の旅へ」

「呆れた。とことん呆れた。吟遊詩人のつもりか！表現力のなさが傑出してるよ。韓国時代劇ばかり見てるから、義政府や成均館や王様の温泉治療を発見しただけでしょうが」

「あのね、地名に残る記憶で覚醒したの。西南はこうだ。水原では漁師が軍馬を洗い、賢者は老いてなお儒生を育て、鬼門の方角に出た王様を双龍が守る。百済の記憶を残しているじゃない。時は流れ、河口を埋め立ててデジタル工業団地を造ったの！」

「もういい。わたし、身を隠すわ!!」

『日本書紀』を拾い読みしているだけでは、欠史八代が当時の皇室の男系継承の正当性を訴える為ということが見えてこないことを言いたかっただけです。

『嘘だらけの日本古代史』を101冊目と捉えておこう。姿勢を整えて再出発か。

先月のことですが、古代史かじり始めの方に聖徳太子のことを聞かれて、「厩戸皇子はいたけどね」と完璧な横流しをした自分が恥ずかしい。最後の引用です。

「聖徳太子はいなかった」という世紀の大珍説

「厩戸皇子はいたけどね」と続くのですが、「その時代にその名前と呼ばれていなかった」は、不在の証明でも何でもありません。

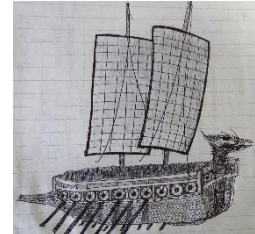
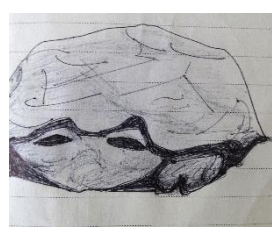
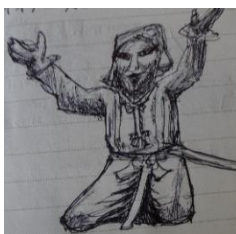
この拙文にユーミンを忍ばせました。ファン歴50年の方は、ここは荒井由実、ここは松任谷由実と気づきます。二人を違うミュージシャンとは言わないでしょう。言葉もコードも時代を反映して、流れるように連続しているのです。

「漢委奴国王」があるのに、奴国から始めないのが不思議でなりません。

ゴジラは突然現れたのではなく、その前に原爆実験があったから。

邪馬台国が突如纏向に出現するなんて、-1.0が何なのか常識で考えて欲しいものです。

土地の記憶を辿り、伝承に耳を澄ませて、天地の話を地上の話に構築し直した古代の通史となるような本を、もし先生が出版されるなら、通説の権化のような私がお手伝いできることはただ一つ。



「

挿絵でつかってください。むかし描いたボールペン画です。加齢により目がショボシヨボして、もう日本書紀は読めません」

「プロに対してこんな得体の知れないもの出してきた、不適切にもほどがあります」と編集長は云うに違いない。